2021 年 12 月 20 日
早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター

早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター・創造的復興研究会

シンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産（文化遺産）登録と 1F 廃炉の将来像を考える」

報告書

開催日時:2021 年 11 月 14 日（日）13:00-17:20
開催方法:Zoom ウェビナー＋会場（福島県立ふたば未来学園中学校・高等学校）
参加者数:109 名

総合司会:阿部加奈子（福島県広野町役場係長）

【基調報告】
原田　浩（元広島市国際平和担当理事兼広島平和記念資料館・館長、広島市ピースツーリズム推進懇談会・座長）
「原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズム」

（報告内容については、報告資料を参照ください）

＜フロアからの質問＞
高校生:震災の記憶が若い世代の中で薄れている。伝承についてアドバイスをいただきたい。

原田:私は 6 歳で被爆し自らの体験を話す事のできる最後の世代となった。永い間、悲惨な体験を思い出したくないから話すことを避けてきたが 1993 年に館長になって、いきなり大きな課題に直面することになった。それは世界最大と言われるアメリカ・国立航空宇宙博物館が「戦後 50 年展」を開催するので広島の被爆資料を貸してほしいとの依頼があった。あわせて相手側の館長から被爆体験を聞かれ悲惨な状況を話さざるをえなくなった。それまで自分の心の中で封印してきた体験をいきなりえぐり取られたような気持になった。被爆者はこのように自分の体験を封印し、話したくないからますます継承が

難しい。
　よく東日本大震災当時のことを伝える者を「語り部」と呼んでいるが、広島では自らの体験を自分が話すことから「被爆体験証言者」としている。被爆者が亡くなりやがて語れなくなっていくことから広島市では証言者に代わって話すことのできる「伝承者」を育成している。伝承者として応募者は多いが、証言者の悲惨な思いを伝えることより自らの主張に重点を置く者も多いなどの課題がある。

高校生:原爆投下の理由はどう思うか。また、広島平和記念都市建設法に関連する他の自治体の事例はあるか。

原田:原爆投下の正当性はほとんど検証されていない。それどころかアメリカでは投下によって戦争の終結が早まったとか多くの命を救ったとか言われ続けてきている。平和記念都市建設法のような事例については長崎でも制定されている。

【パネル・ディスカッション】

第 1 部　広島原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズムについて

司　会:松岡俊二(早稲田大学大学院アジア太平洋研究科・教授)

菊楽　忍:広島平和記念資料館・学芸課職員
多賀俊介:廣島・ヒロシマ・広島を歩いて考える会・代表
高橋洋充:福島県立福島東高校・教諭、福島県浪江町
小磯匡大:ふたば未来学園高等学校・教諭、ふたば未来学園高校 2 年生・三村咲綾
除本理史:大阪市立大学大学院経営学研究科・教授
高原耕平:ひょうご震災記念 21 世紀研究機構人と防災未来センター・主任研究員

松岡:本日は、「広島原爆ドームの世界遺産登録と広島市ピースツーリズム」をテーマに第 1 部のパネル・ディスカッションをセットする。第 1 部は、主に広島の経験から福島が何を学ぶのかを議論したい。

菊楽:原爆ドームの保存までの経緯を話したい。被爆直後に行われた危険構造物整理事業では、原爆ドームが取り壊される予定であったが、当時の広島県都市計画課長の竹重貞藏さんが「ドームは原爆の惨状を後世に伝えるもの」とし、原爆ドームの取り壊しを中止した。
　建築の専門家からもドームの価値を評価されており、1949 年に「平和記念公園及び記念館設計懸賞」の競技設計が行われ、原爆ドームをシンボルにした丹下健三さんの設計案が一等入選した。ドームの遺構は、「被爆者の苦しい記憶を思い出させるのでは？」という批判もあったが、平和のシンボルとしての一面もあるという声がだんだん多くなった。
　1960 年に白血病で亡くなった女子高生の日記が見つかり、楮山ヒロ子さんの日記には原爆ドームを残して後世に原爆の恐ろしさを訴えるようにと書かれていた。その日記に心打たれた広島折り鶴の会は、原爆ドームの保存運動を開始し、1964 年に 11 の市民団体が原爆ドームの保存を求める共同提案を行った。
　その後、1966 年に広島市議会で原爆ドームの保存が決議された。つまり、まずは中学生や高校生の活

動から被爆者団体や平和団体に広がり、最後に市議会で永久保存を決めたという経緯がある。原爆ドームの保存は、市民が支えてきたのである。

多賀:広島市が主導した伝承事業もあるが、やはり限界もある。そのため、私は旧陸軍被服支廠をはじめとした被爆建物の見学をガイドすることで、体験伝承に取り組んでいる。被爆建物は多面的な価値を持っているため、関わりのある場所をできるだけ残し、一つ一つ繋いでいくことで全体像がみえてくると思う。

広島でも原子力は、平和利用であればある程度容認されていたが、福島原発事故がきっかけで、原子力をより批判的に見直す人が多くなった。核と人類の関係をこれからも考え続けたい。

高橋:10 月に勤務校の生徒たち（1 年生約 230 名）と伝承館を見学し、その前後に実施したアンケートの調査の結果では、伝承館を見学した後は、見学前と比べて復興が「まったく進んでいない」と評価した生徒が増えた。現地見学を通して「百聞は一見にしかず」が重要であることを再度認識し、一方、「まだ不十分だが進んでいる印象」も微増していることから、風評被害の払拭に取り組む「福島」と未だ原発事故の影響に苦しんでいる被災地「フクシマ」の分断があることを感じた。

福島が広島と違うところは、住民がいないという点である。広島は被爆後、新・旧住民がすぐ広島市へ戻り、市民自らが復旧・復興に着手した。しかし、福島浜通りの住民は長期間の避難を強いられ、被災地域は住民不在のままに国から「降ってきたお金」が流れている。

広島の経験から、遺構をできる限り保存することが重要であることを学んだ。個人的には、原発事故を後世に伝承するためには、災害で更地になった街並みをそのまま保存した方が、むしろインパクトが大きいと思う。

ヒロシマは被爆による教訓を普遍的な価値である「平和」に繋げている。フクシマの原発事故の教訓は、どのような普遍の価値に繋げることができるのか。それについて考えたい。

小磯:ヒロシマの場合、加害者がアメリカであったが、フクシマの場合の加害者は、原発の安全神話を信じた人、東電の電力を享受した人、経済的恩恵を受けていた人になるのだろう。そういう意味で、自分も「もうひとりの東電」としての「現代人」で、騙す側であった。

さらに、原発事故に意味を見出さなければ、双葉郡の土地・人は、意味なく放射能で汚されて、捨てられることになってしまう。そのため、「イチエフは地域最大の文化資産だ」と言えるようになりたい。『遠野物語』にならえば、「願わくはこれを以って現代人を戦慄せしめよ」というように、是非、私たちの時代を、100 年後の人たちは戦慄してほしい。

三村（高校生）:福島復興に興味関心を持っていない人にどう伝えたらいいのかが、自分の疑問である。語り部を聞く人も関心を持っている人に限られる。関心の喚起が課題であると考える。

除本:パブリック・ヒストリーという研究分野では、大事故・戦争・災害などの「困難な過去」をどのように「地域の価値」に転換していくかについて議論されている。何を地域の普遍的な価値とするのかは、地域が主体となり、外部の人々も交えて議論をしながら作り上げていくことが必要である。

困難な歴史は往々にして立場が分裂しやすい。水俣病の事例でも、沿岸部の漁民と町の中心部の市民の間に深刻な対立が起こっていた。社会的分断を乗り越えるために、1990 年代に吉井市長（当時）が「。困難な過去を価値に反転させることで、分断を修復し、ビジネスや地域振興につなげる」と呼びかけた。その後、水俣市は水俣病の学習を観光振興と結びつける取り組みを始めた。例えば、水俣病の経験を伝えながら、水俣患者による甘夏生産と加工品販売のような取り組みがある。

高原:世界遺産を考える際に、「誰のための」、「誰にとっての」、「何のための」世界登録なのか、という 3 つの問いが避けられない。地域の人々にとっての復興や物語行為、世界・日本の人類の経験と知恵、未来の人にとっての「過去からの贈り物」という 3 つのパターンで考えても良いかもしれない。

阪神淡路大震災の場合は、そもそも遺構保存を考えたことがなく、元通りに戻すという方針であった。被災者の記憶については、震災直後に書かれた手記が大量に出版されていた。しかし、内容が非常にテンプレ的になっている。同じテンプレの書き方によって自分の体験が納得しやすくなるだろうが、テンプレから外れるほど語りづらくなるという両面性もある。

普遍性については、阪神淡路大震災では「防災」をキーワードとした。人と防災未来センターは、震災ミュージアムとして機能すると同時に、災害対応の自治体職員向けの研修や若手研究者の育成も実施している。

世代性については、神戸は広島の平和学習に似ている。被災地域の学校では、先生が生徒に震災のことを丁寧に教えることを通して、震災の記憶がない次世代に当事者性を醸成していくことが大事である。ただ、それは「何のため」なのかを改めて考える必要がある。上の世代が何か固まった体験を話すだけではなく、次世代と共有することが必要である。

松岡:広島の原爆ドームは、当時、何を残そうとしたのか。

原田:当時の市長から世界にどういうメッセージを発信するかを整理するようにとの指示があり、その中にもちろん原爆ドームも含まれていた。当時は建物がどんどん劣化し、民間所有の建物を残せば、所有者の負担が増えることになる。公的施設でも、壊したいという声が少なくなかった。

今考えたら、相当強引に押し切った部分があった。広島の場合、信念というよりも、建造物をどのように残すかを多く議論した。結果的に、所有者、施設の状況、地元や平和団体などの意見を踏まえながら、妥協点を探っていた。近い将来は、世界遺産の原爆ドームだけでなく、被爆建造物の世界遺産群という構想を整理しようと考えている。それは今行政と検討しているところである。

松岡:原爆ドームを残すために、楮山ヒロ子さんの日記に触発された中学生や高校生による保存運動が、大きな役割を果たしたとの話があったが、それはどういう経緯であったか。

菊楽:現在の視点からみると、中高校生が平和運動を引っ張ったというのは奇異に思われるかもしれない。最初は、ロベルト・ユンクという有名な原子力懐疑派のジャーナリストが、原爆ドームが平和のシンボルになりうるのではと話していた。広島折り鶴の会の世話をしていた平和活動家の河本一郎さんがロベルト・ユンクの影響を受けた。

河本さんは被爆で白血病にかかった子供たちの支援をしていて、楮山ヒロ子さんが亡くなった後に、河本さんと折り鶴の子供たちが彼女の日記を読んでみんな日記に感動した。それで彼らは毎年原爆の子の像の前で活動を始めた。その活動がたまたま NHK の全国中継に入り、そこで楮山ヒロ子さんの日記をみんなで読んで、そこから、原爆ドームの保存運動が本格的に始まったのである。子供たちはできる範囲で募金活動や署名活動など、地道な活動をしている。

＜フロアからの質問・コメント＞

井上:私は 50 年近く原子力分野にいるため、福島原発事故は自分にとって、正直、忸怩たる思いがある。私は広島の原爆資料館やアウシュビッツ博物館にも行ったことがある。本当に悲惨で、印象的であった。福島のこともそのように残していくのが非常に大事であると思う。

ただ、1F は事故処理に非常に時間がかかるし、まだわからない課題が非常に多くある。そういうような状況を原子力分野から一般の方に発信することも大事であることを、今日の話を聞いて痛感した。もう一つ、「ヒロシマ」は普遍的価値として平和を世界に伝えているとの話があったが、「フクシマ」は何が普遍的価値として後世に残るだろうか。それは非常に重要な命題を与えられたと考える。

松岡:反原発であろうが、原発推進であろうが、立場を超えて議論ができないとこの問題は進まない。

奥田:遺構の保存とそのテーマは非常に大事である。個人的には、人間社会と科学技術の関係など、後世に伝えるメッセージとしてイメージしていた。もちろん、それはいろいろな人と議論する中で決まっていくべきであると思う。広島は平和というテーマを掲げているが、その価値の共有はどういうタイミングで、どのようにできたのかをもう少し説明していただきたい。

松岡:世界平和あるいは核兵器廃絶は広島から世界に発信する大きな明確なテーマになってきた。そのメッセージが、市民に共有されてきたのはどういう経緯であったか。

原田:平和記念資料館がオープンしたのは被爆後 10 年の 1955 年であった。その頃から行政が平和問題

にしっかり取り組んでいこうという姿勢になった。私が広島市職員として採用されたのが昭和 38 年（1963 年）であり、それ以前の状況は、私自身は体験していない。

しかし、その当時の市民の雰囲気は、被爆建造物をどういう格好で残すのかという賛否両論が渦巻いていたと言ってよい。その中で、行政と所有者がどういう格好で残すかについて、お互いに納得できるように協議していた。つまり、それぞれの建物のそれぞれ違う状況を踏まえ、財源措置も含め、市民合意や所有者合意を得るというように進めた。

高橋:福島と広島の違いとしては、福島では地域住民が 1F 周辺にほとんど戻っていない点が大きい。核の問題や技術の問題を広い観点からみるためには、地域社会に限られないように考えることが重要である。原爆ドームの前には、ネガティブなものが世界遺産に登録される前例がなかったとの話があったが、例えば、1F を既存の世界遺産に付け加えるという形もありうるのではないか。

また、今回のテーマが 2050 年の世界遺産であり、これは 30 年後の話である。今の高校生が 30 年後 40 代後半であり、ちょうど社会の中堅になる。そのため、本日、高校生もシンポジウムに参加されていることは、素晴らしいことである。高校生のみなさんには、伝承施設のあり方を自分の頭で考えてほしい。

第 2 部　1F 廃炉の将来像と 1F 世界遺産登録の目的や推進のあり方について

司　会:崎田裕子（NPO 法人・持続可能な社会をつくる元気ネット・前理事長）

遠藤秀文:株式会社ふたば・社長(技術士)、福島県富岡町
吉田恵美子:NPO 法人・ザ・ピープル・理事長、福島県いわき市
林　裕文:ふたば未来学園高等学校・教諭、ふたば未来学園高校 2 年生・梅津心
高垣慶太:早稲田大学社会科学部 1 年、Hihukusho ラジオ（旧広島陸軍被服支廠・保存活動の市民組織）
洪　恒夫:東京大学総合研究博物館・特任教授

遠藤:1F 廃炉は進行中であるが、1F 廃炉の先の将来像を後世にどのように伝えるか、今から考える必要がある。広島の原爆ドームは世界遺産という大きな存在となり、世界でも平和のシンボルとなっている。一方、福島はキーワードがいまだに定まっていない。キーワードを定めることで、1F の将来像もみえてくると考える。

1F の世界遺産登録を推進する際に、1F のみに焦点を当てることが適切なのか疑問に思う。原子力災害、地震、津波の被害を受けた施設・集落の地域再生プロセスに注目することも求められる。双葉郡地域を俯瞰的に見て、後世に残すものや新たな価値の創造を今から考えていくべきである。また、全国に避難した被災者に故郷を誇りとして思ってもらうことも重要である。蓋をせず可視化することは、福島だけでなく、日本のためでもある。世界からどう見られるかを意識する必要がある。

吉田:私は 1F 廃炉の先研究会に所属した当初は、いわきの一般市民として廃炉という技術的分野に踏み込むことに抵抗があった。また、双葉郡内の人間でないという点も心理的なバリアであった。ただ、専門家との議論を通して、廃炉自体の難しさや専門家の抱えている課題を住民が認識しきれていないと感じた。

廃炉の先は科学的な課題だけでなく、社会的側面も考える必要がある。廃炉後に、敷地を更地に戻してほしいと要求する人はいるが、それは難しいことも再確認した。伝承館の展示のように、モノでなければ語れない部分と人でなければ語れない部分という 2 つの側面がある。1F 廃炉の先を考える際に、更地化したら、語るべきモノをなくしてしまう可能性があり、次世代が後悔することを懸念する。地元には、請戸小学校の遺構保存のように更地化を防いだ事例もあるし、チェルノブイリも世界遺産登録を目指している。福島は、今持っているものを失うことなく次世代に繋いでいくために、世界遺産を目指すといった意識を地域社会で共有することが重要である。

林:ふたば未来学園の未来創造探究は、3 年間で 8 単位となっており、普通の学校より倍以上の時間をかけて行っている。探究学習のタイトルをテキストマイニングで分析すると、生徒が地域の課題に対し、主に地域再生に関心を持っていることが分かる。

風評被害の払拭や教訓の伝承がよくみるテーマであるが、その教訓とは何かについて、探究が足りない印象がある。それは、原子力の緊急事態宣言は継続している中で、教訓をまとめることが難しいからだろうと考える。生徒の探究を 1F の世界遺産化と絡めるには、知見やデータが少ないように感じる。探究学習はやはり地域再生や人々のウェルビングの向上につなげたい。

梅津（高校生）:幼稚園の頃に被災して以降、家族と一緒に山形に引っ越し、福島の状況を気にしながら山形で生活していた。私は中学入学を機に福島に帰還したが、まだ双葉郡に帰還できず、辛い気持ちを抱えている人たちはたくさんいる。震災の知識をしっかりと学んで、それを次世代に伝えるのが私たちの使命である。震災を何かの形に残すためには、1F 遺構は保存すべきであると考えている。

高垣（大学生）:私は高校時代から広島で被爆建物の保存活動に取り組んできた。現在、広島には被爆建物が 86 棟もあり、一つ一つの建物の訴えるメッセージがそれぞれ異なる。被爆建物は「声なき被爆者」であると同時に、広島の歴史の「証人」でもある。昔のことを知らない世代にとって、遺構は広島の歴史をどう捉えるかを考えるための重要な根拠になる。1F 廃炉も長期的な課題である。1F や震災遺構をどう残す、または残さないかは、未来を担っていく当事者として、私たちの世代で考えるべきである。

崎田:平和教育を受けてきたきっかけを教えていただきたい。

高垣（大学生）:保育園から平和教育を受けてきて、6 歳の時に平和資料館に遠足で行った。展示内容のショッキングさに驚き、それがきっかけで自分事として活動を始めた。

洪:福島浜通り地域で、エコミュージアムの構築を提案する。エコミュージアムとは、地域全体を博物館とし、人々の生活、自然文化、社会環境の発展過程を保存、展示、育成することで、社会発展に寄与するという野外博物館である。コア、周辺のサテライト、それをつなぐトレイルが構造要素となる。エコミュージアムにおいて、1F 廃炉はサテライトの一つとするのが良い。リアルな出来事を物語る 1F 遺構は大き

な訴求力を持っている。未来世代に教訓を継承する際に、1F は象徴と見なすことができ、多くの情報や語りを提供できる。また、サテライト、コア、トレイルを連携させることで、通常の展示・情報施設の枠を超えた拠点としての効果が期待できる。

東日本大震災・原子力災害伝承館をコア施設として位置付けられる。伝承館の補完として A&S 拠点の導入の効果が期待できる。補完施設には長年蓄積していくアーカイブ、対話、情報の受発信などの機能が必要であり、ギャラリーやオーディトリアムのような人々が参加しやすいプラットフォームが重要である。

崎田:1F 世界遺産登録を推進する中で、地域住民が自分事とすることが重要である。それについて、吉田さんの意見を伺いたい。

吉田:私は原発事故の直接的な被害者・避難者ではないため、一歩離れたところからコメントできる。複合災害の当事者の一人という意識を持つために、内部から議論を生み出しにくいのであれば、世界遺産登録の大きな枠から地域を見直すことが必要である。世界遺産登録の推進は浜通り地域、さらに福島全体にとって、マイナスのものでもプラスの価値を生み出せると再認識するきっかけとなり得る。

遠藤:地域の目標を掲げることが大切である。今地域間で分断が起こってしまい、時間と共に顕著化している。分断を乗り越えるために、世界遺産登録に向け、ポジティブな目標設定が大事である。広島も当初の賛否両論から、最後にアメリカの見方まで変え、世界遺産化を実現した。これは福島が学ぶべきものである。福島とは何か、ずっと考えてきた。原発事故後、人間の技術に対する傲りを反省した。自然と技術に持つべき謙虚な気持ちは、福島からの学びであると思う。

宮野：若者は自分で考えた上、世界遺産が必要であると思えば、それに向けて活動していけばいい。ただ、事故を世界遺産にするのか、廃炉を世界遺産にするのか、意味が異なるため、しっかりと考える必要がある。高校生にはぜひ信念を持って突き進んでほしい。この点は広島の成功の要因でもあるため、高校生の努力を支援したい。なお、地元の声が聞こえないことが問題であり、地元の人々に大きな声でないと届かないことを自覚してもらうことも重要である。

鈴木:10 月に生徒を引率して廃炉国際フォーラムに参加した。参加した高校生は、登壇するまで廃炉や 1F の将来像を考えたことがなかったようである。登壇をきっかけに、廃炉を考えて議論した経験が、自分の視野を広げたと言っていた。このような自ら主体的に学ぶ機会をもっと生徒に与えたい。このシンポジウムの事前学習として、生徒が 1F 廃炉や地域の将来像、そして広島の原爆ドームを重ねて考えるきっかけになった。これからの広島研修行の際に、様々な人と交流する中で、教科書で学んだこと以外の平和学習ができると期待する。

＜フロアからのコメント＞

高校生:震災の映像はショッキングな映像のため、見せたくないと親から言われたことがある。しかし、高垣さんの平和教育を保育園から受けてきたという話を聞いて驚いた。具体的にどういう教育なのかを伺いたい。

高垣（大学生）:広島の公立の小中高では平和教育がカリキュラムに組み込まれている。保育園では、資料館に行ったり、今起こっている戦争についての本を読んだりする形で平和教育が行われていた。戦争は終わったものではなく、今でも続いていることを教えてもらっていたように感じる。

高校生:核兵器禁止条約に加盟することで、日本が被る不利益について考えたことはあるか。そして、どのような不利益が考えられるのか。また、1F は事故処理がまだ収束しておらず、原爆ドームと同じものとして捉えることができないと思う。後世に何を残せるか。

高垣(大学生):日本は核兵器の被害・影響を一番知っている国として、条約に加盟しないことがむしろ問題である。私は、核兵器を持つことで平和を保つことは本当の平和ではないと考え、条約に日本が向き合うべきである。1F を福島復興の象徴とすることについて、個人的にはそう考えていない。しかし、場所が残ることが、将来世代に記憶の伝承として重要であると考える。何を残すかは、中高生の皆さんの今後の課題になる。

洪:伝承館やアーカイブ施設などの物語る場所という点を繋いで線、そして面にして、未来を創っていくことが重要である。そのため、共通性を見据えながら、広い視点と長いスパンのプランニングが求められる。時間が経つとともに、人も変わる。共に明るい未来を目指す意識を時間経過と共に発展していく考え方が求められる。

原田:国や県に頼るのではなく、地元住民も一人ひとりが自分事として考える姿勢も大事である。資料の保存や体験の継承など、できることはたくさんある。一人ひとりができることをつなげたら良い。広島の平和記念資料館はやはり原爆の悲惨な体験を十分に表現していないと思う。展示しにくい部分は確かにあるが、どこまで表現できるかを議論した上で、展示資料を充実させていくことが求められる。住民の意見をふまえその在り方についても議論していく必要がある。

崎田:地元の方だけでなく、今の世代を生きている人々全員で考えるべきである。本日のシンポジウムをきっかけとして今後も議論を続けていきたい。

【閉会挨拶】

松岡俊二（早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンター長）

本日のシンポジウム「広島原爆ドームの世界遺産登録と 1F 廃炉の将来像を考える」の閉会にあたり、主催者を代表して、閉会の挨拶を述べさせていただきます。

私は、2011 年 3 月以来、この 10 年間、社会科学の研究者・専門家として福島復興研究に取り組んできました。この間、2017 年 5 月に早稲田大学ふくしま広野未来創造リサーチセンターを開所し、長期的かつ広域的視点から福島復興の調査研究を行ってきました。2019 年 1 月に楢葉町の「ならは CANvas」で開催した第 3 回ふくしま学（楽）会で、2050 年に持続可能な福島浜通り地域の形成を目指した「ふくしま浜通り社会イノベーション構想（SI 構想）」を提案しました。

早稲田大学リサーチセンターは、「ふくしま浜通り社会イノベーション構想（SI 構想）」の具体化のため、2019 年 7 月に 1F 廃炉の先研究会を設置し、1F 廃炉プロセスの地域資源化と 1F 廃炉の将来像に関する多様な選択肢について研究を進めています。

また、2020 年 4 月には、国際芸術・学術拠点構想研究会（A&S 研究会）を設置し、原発事故を踏まえた新たな学術や文化芸術の拠点の形成や原子力災害や複合災害の教訓の未来世代への継承と地域社会をまるごと震災ミュージアムとするエコミュージアム構想について調査研究をしています。

さらに、今年（2021 年）7 月には第 3 の「まとめ」の研究会として、創造的復興研究会を立ち上げ、2050 年の福島浜通り地域の将来像について研究をはじめました。7 月 8 日に開催したキックオフ研究会では、富岡町の遠藤秀文さんから 2050 年に 1F を世界遺産登録することを目標にしてはどうかとの提案がされました。今年の 1 月に開催した第 7 回ふくしま学（楽）会や 7 月末の第 8 回ふくしま学（楽）会においても、未来学園の高校生から 1F を事故遺構、アーカイブとして将来世代に残すべきだとの複数の発言がありました。

国際的には、1986 年 4 月のチェルノブイリ原発事故から、今年、35 年を迎えたウクライナ政府は、事故を起こした 4 号機だけでなく、立入り規制区域の 30km 圏域も含めて、世界遺産登録をすることを構想しています。また、イギリスやアメリカなどでも原子力施設の遺産化に関する Nuclear Heritage の学術研究や市民運動が進んでいます。

早稲田大学リサーチセンターは、福島の地元の皆さんの意見やチェルノブイリ原発などの国際的動向を考え、2050 年に原子力災害からの福島復興の象徴として 1F の世界遺産登録を行うことを社会目標として掲げ、調査研究を開始することとしました。その最初の取り組みが、本日のシンポジウムです。

今日の原田さんの基調講演にもありましたが、広島原爆ドームの永久保存の広島市決議は、被爆 21 年後の 1966 年でした。世界遺産登録は、被爆 51 年後の 1996 年でした。広島原爆ドームの保存における中高生の折り鶴運動、世界遺産登録に向けた 165 万人の署名、広島県の全ての 87 の市町村議会や県議会における世界遺産登録を求める意見書の採択など、広島市民は大変な社会的努力を払ってきています。

広島の原爆ドームの歴史から深く学び、1F 廃炉や福島復興の現在の状況を考えると、1F の世界遺産登録という 2050 年目標の達成は、とても遠く困難な道のりが予想されます。

最近、「早く行きたいなら一人で行け、遠くへ行きたいなら皆んなで行け」というアフリカ発祥といわれている諺について、いろいろと考えます。第 100 代内閣総理大臣になった広島選出の岸田文雄首相も、10 月 8 日の所信表明演説の最後に引用していました。

この諺は、岸田首相の所信表明でもそうですが、通常、後半の「遠くへ行きたいのなら皆んなで行け」ということを強調するために使われています。ただ、私は、福島復興研究に 10 年以上取り組んできた社会科学者として、2050 年の 1F の世界遺産登録を考えたとき、一人で早く行く人も、皆んなで遠くま

で行くことも、両方やらないといけないのだろうと考えています。

私は、高校時代、山岳部で山登りをしていましたが、高校の大先輩に冒険家・植村直己さんがいます。植村さんは、1970 年、29 歳で、日本人として初めてエベレスト登頂を果たしました。その後は国際登山隊などで活躍しましたが、後半は、5 大陸最高峰の単独登頂や北極点への単独到達にこだわり、1984 年、世界初の冬のマッキンレー単独登頂を果たしたのち、下山途中で消息不明となりました。

現役の登山家に、山野井泰史さんがいます。山野井さんは、1994 年、29 歳で、ヒマラヤの 8,188m のチョ・オユー南西壁の初登頂を単独で果たした世界的クライマーです。山野井さんは、無酸素で単独で困難なルートを、いかに早く、いかに高く登るのかに挑戦してきました。先頃、登山界のアカデミー賞と言われるフランスの「ピオレドール」生涯功労賞を授与された山野井さんは、「どんなに困難な山でも、一度、誰かが登頂を果たすと、その登ったという事実が、他のクライマーを鼓舞し、勇気づけ、次々と多くの人が登れるようになる」と語っています。

一人で新しい世界へ踏み出す勇気が変革者をつくります。一人の変革者が道を切り開くことによって、やがて多くの人が大きな道を作り、皆んなが遠くへ行けるようになります。

本日は、日曜の午後というお休みの時間を、福島と日本の未来を創るシンポジウムに、最大時 100 名を超える多くの方にご参加いただき、大変熱心なご議論をいただき、誠にありがとうございました。1F の世界遺産登録の可能性の調査研究を始める大変良いキックオフになりました。主催者として、心より御礼申し上げます。原田浩さんをはじめとする広島からの参加の方々も含め、参加者の皆さま、本日は誠にありがとうございました。

＜Q&A、チャット＞

一般参加者:早大リサーチセンターが、なぜ広野町に拠点を構えたのか素朴な疑問を抱いております。震災原発事故からの復興というテーマからすれば、焦点の場に立つことこそ重要ではないでしょうか。焦点の場とはすなわち、原発事故の当事地域である大熊・双葉あるいは浪江町ではないだろうか、と考えております。避難指示区域であることなど依然難しい問題はありますが、役場・住民が戻って来ている場所にフィールドを構えることこそ、研究者・研究機関として大切な姿勢ではないでしょうか。

早稲田大学:早稲田大学はリサーチセンター設立当時、帰還が始まっていた広野町に拠点を置きました。大学からすると、あまり自治体の境界線を意識していないのですが、実際、浜通りおよび被災全地域が調査研究活動の対象であると考えており、活動を広げています。

一般参加者:高原さんの「誰」にまず「誰が」がないのは、なぜでしょう？誰が世界遺産登録をするのでしょう？原爆ドームは誰が世界遺産登録をしたのでしょうか？

高原:過去を象徴化する（語る、大切なものとして意味づける）主体は存在しないかもしれない、と思うからです。

一般参加者:一つ伺いたいのですが、原子力平和利用博覧会はなぜ、どういう目的で開催されたのでしょうか。

菊楽:全国巡回していた原子力平和利用博覧会が、昭和 31 年（1956 年）5 月 27 日から 6 月 17 日まで、平和記念資料館と平和記念館を会場に開催されました。この博覧会は、核の恐怖を取り除き、「原子力の平和利用」への理解を深めようと企画されました。他の開催地とは異なり、広島の会場では、展示の説明役を広島大学の学生が担当していました。難解な物理学の理論を分かり易く解説して好評だったと

の報道が残っています。しかし、被爆者団体からは、原子力のマイナス面の展示がなく物足らないとの批判がありました。22 日間の会期中、11 万に近い入場者があり、博覧会は盛況のうちに終わりました。

一般参加者:被爆地広島で開催された博覧会で原爆の悲惨さを除外したというのは理解に苦しみます。

菊楽:広島だけではなく、同じ展示内容で日本中を巡回していました（読売新聞社が後援)。展示はアメリカ側が準備したため、広島の原爆被害は無視されました。当時、広島にあった「アメリカ文化センター」の所長（アメリカの外交官）は、広島の市民感情を本国に伝えたが、取り上げられなかったと言われています。

一般参加者:貴重な情報ありがとうございます。福島原発立地当時の福島県知事が外遊の途中、ジュネーブで開かれていた第 1 回原子力平和利用国際会議を見学し、「原子力の平和利用として原子力発電の重要性を認識…」と旅行記に記しています。この年 1955 年に正力松太郎が原子力担当大臣に就いていて、原子力平和利用博覧会の主催実施とも繋がっていると示唆をいただきました。

一般参加者:今回のイベント・議論に限らず、双葉町の福島県伝承館にも共通しますが、今この現状・現実の由って来るところ（例えば浜通りの地が原発適地として選ばれた背景歴史）を踏まえることなく、「創造的」という言葉に象徴されるお仕着せ・復興ありきの議論へ傾斜し、被災者住民が置き去りにされていることに強い違和感を覚えています。一方、福島原発立地当時の日本原子力産業会議の調査報告や、福島県による浜通り開発に調査報告（第 2 部の林さんスライド中の 1968 年 9 月 4 日福島民報紙面で引用）等、いわゆる歴史公文書ともいうべき記録が非公開あるいは廃棄されて不存在とされ、当時何があったかを遡って調べ共有することも難しくなっています。今のこの状況に繋がる近い過去を知る努力を棚上げしての〈観光を始めとする交流人口の増大をもたらす…経済的な便益も大きい〉（井出明氏論考「福島第一原発の世界遺産化について考えるーその許容性と必要性ー」より抜粋引用）とした考え方・言説には強く異を唱えたいと思います。

早稲田大学:ご意見ありがとうございます。我々も、そうした歴史的・文化的。社会的背景に根ざした議論の必要性を感じています。是非そのあたりも、今後、広く議論させていただきたいです。

除本:当方の FB 投稿をお読みいただいてのことと思います。1F 世界遺産化の議論は、井出明先生もなさっているところですが、今回の会は井出先生の考え方を基礎にしているわけではありません（もちろん有力な議論の 1 つとして捉えていますが)。むしろ、遠藤秀文さんの言葉から発したというのが実際です。

一般参加者:世界遺産化について、チラシのシンポジウムの背景と目的――のところに浜通り地域の参加者から提案があった…とあり、そもそもの発端は井出さんではないことは承知しておりました。本日のプレゼンの中で、富岡町の遠藤さんのご発想であることを理解いたしました。井出さんの論考については言葉尻を捉えるのではなく本旨を取り違えることなく、さらに読み込みをしたいと思いますが、引用した箇所も含めて、近い過去への眼差しが希薄に見えるところが気になっております。ありがとうございました。復興祈念公園シンポジウムのご登壇楽しみにしております。

高橋:「お仕着せの」「復興ありき」、大変共感いたします。学校現場では、以下のような取り組みをすることを促されています。（やるやらないは学校で選べますが）上から言われたから、では現場は動きません。まずは教員に勉強する余裕をもたせて、しっかり考えさせることが必要だと思います。

一般参加者:一点、個人的意見を書かせていただきますが、世界遺産登録に向けた取組で「1F」が最前面に出ることには違和感を感じています。例えると、「原爆ドーム」ではなく、広島、長崎に投下された「原子爆弾」を最前面に打ち出して登録を目指すようなものだと、自分はそう感じました。

もし、世界遺産登録を目指すならば、「1F」ではなく、1F の周辺でいまだに帰還困難区域になっている被災地域、除染で発生した土壌を保管する中間貯蔵施設（土地を提供した方々の苦渋の決断）など、復興に取り組む福島の人々、各被災場所、そのような被災者側の視点での打ち出しが大切で、加害施設の 1F が最前面に出てしまうとその趣旨がズレてしまうように思います。

アウシュビッツの強制収容所など、加害施設で登録された事例もありますが、そのような施設では命を落とした方々（被害者）も多数存在しており、1F のような一方的な加害施設とは性質が異なるように思います。

モニュメント的なものに目が行きがちな世界遺産ですが、原爆ドームのご紹介でもあったような、平和に向けた活動の象徴としての世界遺産が「原爆ドーム」であることと同様の考え方で、福島の復興の象徴として「1F」を位置づけることにはどうしても違和感を感じてしまいます。

世界遺産登録の審査基準等を無視した個人的感覚での意見ですが、後世に残すべき遺産は「1F」ではなく、原発事故から福島、日本が復興していくための様々な人々の、それぞれの立場での努力・取組こそが本来の残すべき遺産、後世に伝えていくべきものであると考えます。

一般参加者:未だに原子力緊急事態宣言中であり、デブリの取り出しもいつになるかわからない。廃炉の中長期ロードマップの見直しが必要な状態の中で、事故炉である 1F を遺構にするという考えが、なぜ今出て来たのかが疑問です。

先ほど高校生が発言していましたが「放射線が状況を悪化させていると知った」と発言していましたが、1F 周辺地域は高線量で住むべきではないところに人々を帰還させる政策の問題、つまり被爆の問題をどう考えるのか、そこを基本に据えた上で考えてほしいと思います。原爆投下から 76 年が経っても、未だに放射線障害に苦しむ当事者、被爆二世三世がいる中で、広島の遺構運動が引き継いできた、核と人類は共存できないという考えは基本にあるのでしょうか。

広島の平和教育のようなものが福島にはなく、むしろ原発安全神話に代わる放射能安全神話を子どもたちに刷り込むような教育が行われています。原発事故の惨状の証言より、復興が優先されている福島の現状の中で、1F の遺構化については違和感を持ちます。

早稲田大学:我々も 1F 廃炉のプロセスを学ぶ場を設け、その中では、1F を遺構として残すことは難しいというという意見の専門家もいます。ただ、一つの選択肢や可能性として、残す（保存）という議論もしておく必要があると思っています。意見はいろいろあっていいと思います。是非、次回はそうしたご意見も入れて議論ができればと思います。ありがとうございます。

一般参加者:世界の伝承館は、もっと生々しいもの。戦争の迫害の反省を率直に示している。日本はなぜ、オブラートに包んでしまうのでしょう。

宮野:良い対話会だったと思います。齟齬の部分も理解して、次に何をすればいいのか、考えることが必要ですね。今後とも、よろしくおすすめください。

以上